

インターンシップ科目の運用変更が 就職成否に与える影響

吉田 尚子・原田 章

Effects of changes in internship program operational processes on employment success of college graduates

Naoko YOSHIDA and Akira HARADA

Otemon Business Management Review, Vol.27, No.1

インターンシップ科目の運用変更が 就職成否に与える影響

吉田 尚子・原田 章

1 問題と目的

本研究では、インターンシップ科目の運用の仕組みを変えることが学生の就職成否に影響を与えるのかどうかについて検討することを目的とする。近年、我が国の産業構造や就業構造が急速に変化していく中で、産学協働で人材育成に取り組むことが必要となり、インターンシップは多くの大学で企業や地域と協働して普及・促進されるようになった。インターンシップは、坂爪ら（2020）が指摘しているように学生にとって就職活動を進めるうえで重要な過程であるだけでなく、大学にとっても人材育成における教育効果の高い取り組みのひとつである。そのため、インターンシップに関する研究は、参加することによるプラスの効果を指摘する研究が多く（田中・立野，2021）、大学が関与することがどのような教育効果をもたらすのかについて「科目の運用」の視点で検討された研究はあまり見られない。そこで本研究では、インターンシップ科目の運用変更を行った年度を比較して、インターンシップの単位修得と就職成否の関係を調べた。

「インターンシップの推進に当たっての基本的考え方」（平成9年制定，平成27年一部改正）では、インターンシップを「学生が在学中に自らの専攻、将来のキャリアに関連した就業体験を行うこと」と定義し、「インターンシップの教育目的を明確化し、これに基づき、必修か選択か、何年生で実施するか、授業期間中に行うか休業期間中に行うか、期間をどのくらいにするかなど様々な点について、どのように行うのが最も効果的かという観

点から検討すること」を大学に求めた。これを受けて大学は、インターンシップを取り入れるだけでなく、大学の単位に組み込むといったやり方でキャリア教育における重要な科目として教育課程の中に位置づけた。インターンシップは、多くの大学でキャリア教育の実践として取り込まれるようになった。その結果、インターンシップの実施大学数や参加学生数は、平成9年以降、徐々に拡大していった。Table 1は、文部科学省の調査による大学（学部・大学院）におけるインターンシップ実施校数・参加学生数およびそれぞれの割合を示したものである。Figure 1は、Table 1の経年推移を図で示した。文部科学省の調査（2019）によると、単位認定のあるインターンシップ（特定の資格取得に関するものを除く）を実施している大学（学部・大学院）は、令和元年で全大学の71.6%あり、これは平成9年当時と比較すると5倍強にまで増加したことになる。しかし、単位認定しているインターンシップに参加している学生は、年々増えつつあるとはいえ、2018年度、2019年度と全学生の2.9%にとどまっていた。多くの学生は、大学が関与しない自由応募でのインターンシップに参加していると見受けられた。大学が関与しないインターンシップの中には、就業体験を伴わないものや、就職活動そのものになっているものが存在するようになり、本来のインターンシップの意義が十分に果たされないことが懸念された。

Table 1 大学（学部・大学院）におけるインターンシップ実施校数・参加学生数

※単位認定を行うインターンシップであり、特定の資格取得に関係しないもの

年度	平成 8	平成 9	平成 10	平成 11	平成 12	平成 13	平成 14	平成 15	平成 16	平成 17	平成 18	平成 19	平成 23	平成 24	平成 25	平成 26	平成 29	令和 元
実施校数 (校)	104	107	143	186	218	281	317	384	418	447	482	504	544	536	542	566	565	563
実施率 (%)	17.7	18.3	23.7	29.9	33.5	41.9	46.3	55.0	59.0	62.5	65.8	67.7	70.5	69.2	69.8	72.9	72.4	71.6
参加学生数 (人)			14,991	19,650	21,063	25,063	30,222	34,125	39,010	42,454	50,430	49,726	62,561	66,818	67,691	72,053	82,343	83,961
参加率 (%)				0.7	0.9	1.1	1.2	1.4	1.5	1.8	1.8	1.8	2.2	2.4	2.4	2.6	2.9	2.9

参考資料：インターンシップのさらなる充実に向けて議論のまとめ
令和元年度 大学等におけるインターンシップ実施状況について
(平成8年度～令和元年度)

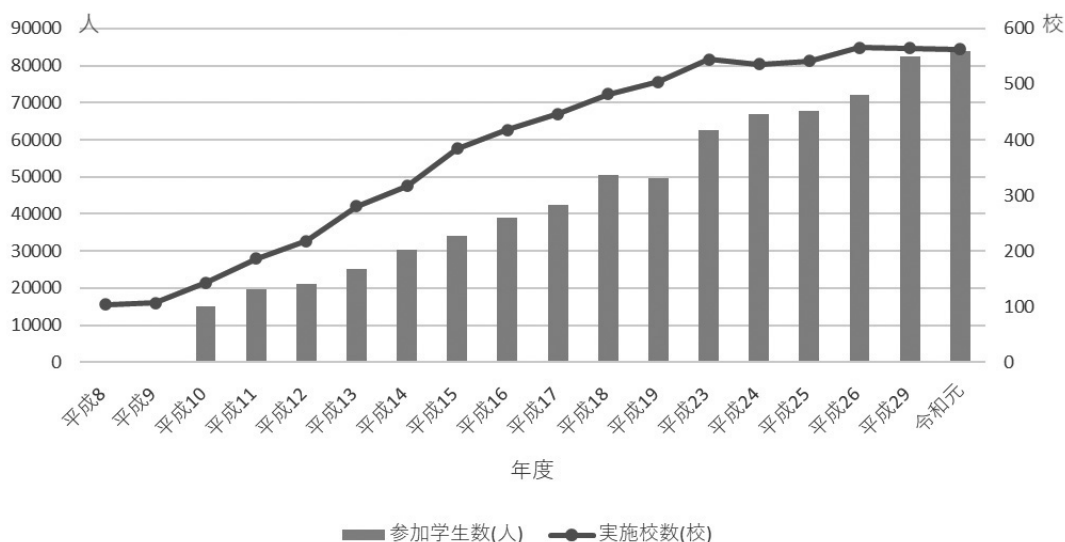


Figure 1 大学（学部・大学院）におけるインターンシップ実施校数・参加学生数の推移

「インターンシップの推進等に関する調査研究協力者会議（2017）」は、「大学等において単位認定を行うインターンシップへの学生参加率が国際的に見ても特に低いなど、量的な拡大が課題となっていると同時に、事前・事後学習が実施されず教育効果が十分でないなど、質的な充実についても課題として挙げられている。」と述べて、インターンシップの量の拡大に伴い、「質の充実」が課題となっていることを指摘している。そこで本研究では、インターンシップ科目の運用方法を工夫することによって、「量の拡大」と「質の充実」に取り組んだ追手門学院大学の事例を取り上げて、科目の運用変更が就職成否に影響を与えるのかどうかロジスティック回帰分析を用いて検討

した。

追手門学院大学におけるインターンシップ強化の取り組み

追手門学院大学では、インターンシップをキャリア教育プログラムのひとつとして運用してきた。吉田（2021）によると、インターンシップを含むキャリア教育の運営は、2013年1月の事務組織改編により、それまで就職支援組織に置かれていた運営主体が教学組織に移管された。これは、キャリア教育を「教育」として明確に位置づけるための施策であった。これに伴い、2014年度と2015年度には、インターンシップを含めたキャリア教育プログラムのカリキュラム改定を行った。

Table 2 追手門学院大学のキャリア教育カリキュラムの変遷（2013年度～2015年度）

			経済学部				経営学部		心理学部		社会学部		国際教養学部			
入学年度	科目名	配当期	配当年次				履修区分					特記事項				
			1	2	3	4	※太字イタリック体は、改定を示す。									
2013	キャリアデザイン論	秋	○	○	○	○	全員履修	全員履修	選択	選択	全員履修	経済・経営・文学部で全員履修 追大プロジェクト科目は、 最大8単位まで卒業要件として認める。				
	キャリア形成論1	春		○	○	○	選択	選択	選択	選択	選択					
	キャリア形成論2	秋		○	○	○	選択	選択	選択	選択	選択					
	インターンシップ1	春			○	○	選択	選択	選択	選択	選択					
	インターンシップ2	秋			○	○	選択	選択	選択	選択	選択					
社会人の基礎	秋			○	○	選択	選択	選択	選択	選択						
2014	【全員履修】キャリアデザイン論	秋	○	○	○	○	全員履修	全員履修	全員履修	全員履修	全員履修	全学部で全員履修 追大プロジェクト科目は、 最大8単位まで卒業要件として認める。				
	キャリア形成論1	春		○			選択	選択	選択	選択	選択					
	キャリア形成論2	秋		○			選択	選択	選択	選択	選択					
	【新設】キャリア形成論3	春			○		選択	選択	選択	選択	選択	インターンシップ履修の拡大				
	【新設】インターンシップ基礎	春			○	○	選択	選択	選択	選択	選択					
	【新設】インターンシップ実習	秋			○	○	選択	選択	選択	選択	選択					
社会人の基礎	秋				○	選択	選択	選択	選択	選択						
2015	キャリアデザイン論	秋	○				全員履修	全員履修	全員履修	全員履修	全員履修	全学部で全員履修 キャリア科目群は、すべて卒業要件単位として認める。(一部上限あり)				
	キャリア形成論1	春		○			選択	選択	選択	選択	選択					
	キャリア形成論2	秋		○			選択	選択	選択	選択	選択					
	キャリア形成論3	春		○	○		選択	選択	選択	選択	選択	インターンシップは4単位まで卒業要件単位として認める。				
	インターンシップ基礎	春		○	○		選択	選択	選択	選択	選択					
	インターンシップ実習	秋		○	○		選択	選択	選択	選択	選択					
	【新設】インターンシップ1	春	○	○	○	○	選択	選択	選択	選択	選択					
	【新設】インターンシップ2	秋	○	○	○	○	選択	選択	選択	選択	選択					
	【新設】インターンシップ3	春	○	○	○	○	選択	選択	選択	選択	選択					
	【新設】インターンシップ4	秋	○	○	○	○	選択	選択	選択	選択	選択					
	社会人の基礎	秋				○	選択	選択	選択	選択	選択					

参考：吉田尚子（2021）「キャリア教育プログラムの変更が大学生の就職状況に与える影響」より抜粋

Table 2は、そのカリキュラム改定の変遷を示したものである。

2014年度改定でのインターンシップにかかる内容の変更は、「学習」を強化する取り組みであった。具体的には、低学年からのインターンシップへの参加を促すために科目の配当年次を繰り下げ、インターンシップの実習に参加する学生に事前・事後学習を義務付けた。また、インターンシップの運営については、教学組織に専門の教員と職員を配置して、実習先企業と学生のマッチングや折衝を行うなど、実質的な運営の役割を「教学部署」が担った。

事前学習は、実習に必要な心構えや考え方、知識・スキルを学び身につけることを目的として行い、実習先へのエントリーや実習先の決定にも大学が関与した。事前学習を受講した上でインターンシップに参加することが、単位認定の条件であった。事前学習の内容は、次のとおりであった。

- (1) インターンシップ実習に必要な心構え、実習先の選び方
- (2) 履歴書・自己紹介書の書き方

- (3) 業界・企業研究
- (4) 参加目的・目標の明確化
- (5) ビジネスマナー研修

また、実習では、受入事業所の一員として仕事を体験することや、実習中に毎日、実習日誌を書くことで、実習での経験や学び・気づき等を学生に振り返らせた。

事後学習は、実習での経験を振り返り、学びや気づきを共有し、今後の大学生活への活かし方を考えることを目的として行い、実習報告会で、各自が実習で得た経験と学び、今後の目標を資料にまとめ、発表することを義務付けた。報告会では、受入事業所の方から講評してもらう機会を設けた。

2015年度改定では、インターンシップの履修機会の拡大を図り、参加人数を増加させる取り組みに注力した。具体的には、配当年次の制限を取り払い、自由応募で参加するインターンシップも単位認定する仕組みを整えた。これにより、学生はいつでも、何度でもインターンシップに参加することが可能になった。Table 3は、2013年度から2015年度のカリキュラムにおけるインターンシッ

Table 3 インターンシップの単位認定の仕組み

入学 年度	区 分	分 野	授業科目名	単位数		配当年次				履修要件
				必修	選択	1	2	3	4	
2013	総合科目	追大プロジェクト科目	インターンシップ1	2				○	○	セット履修
			インターンシップ2	2				○	○	
2014	総合科目	追大プロジェクト科目	インターンシップ基礎	2			○	○		セット履修
			インターンシップ実習	2			○	○		
2015	基礎教育科目	キャリア科目群	インターンシップ基礎	2			○	○		最大4単位 まで卒業要 件として認 める
			インターンシップ実習	2			○	○		
			インターンシップ実習1	1		○	○	○	○	
			インターンシップ実習2	1		○	○	○	○	
			インターンシップ実習3	1		○	○	○	○	
			インターンシップ実習4	1		○	○	○	○	

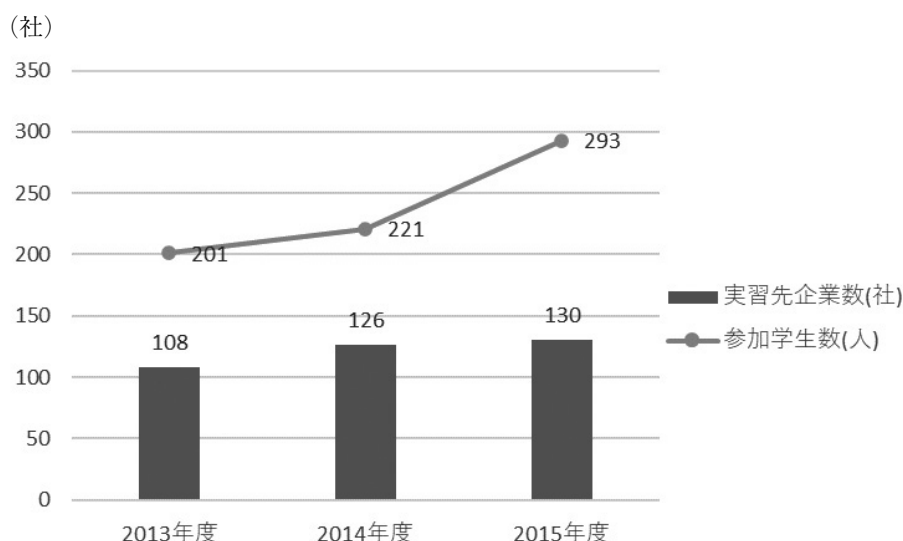


Figure 2 インターンシップ実習先企業数と参加学生数の推移

プの単位認定の仕組みを示したものである。

このようなインターンシップ科目の運用を変更する取り組みの成果は、大学が関与して実施したインターンシップの実績に少しずつ表れた。2013年度が実習先企業108社、参加学生数201名であったのに対して、2014年度は実習先企業126社、参加学生数221名、2015年度が実習先企業数130社、参加学生数293名となった。Figure 2は、2013年度から2015年度までのインターンシップ実習先と参加学生数の推移を図で示した。

インターンシップがキャリア教育の実践であり、キャリア教育が単に卒業時点の就職を目指すものではないことは周知のとおりである。しかし、吉田

(2017) が述べているように、大学生が直面する最大のキャリア課題は「職業選択」であり、大学は社会に出る直前の教育機関として、キャリア教育の成果を就職結果に求められる。インターンシップはキャリア教育の中でも特に、大学生の就職に関係が深い科目であるため、大学が履修方法や単位認定の仕組みといった科目の運用に積極的に関与することが、学生の就職結果にいい影響を与えるのではないかと考えた。

2 方法

調査対象は、関西圏にある中堅私立文系大学の追手門学院大学の学部学生とした。追手門学院大学は、2018年3月現在、学生数が約7000名、設置学部が経済学部、経営学部、地域創造学部（2015年度開設）、社会学部、心理学部、国際教養学部の6学部で構成されていた。

本研究の目的を検証するために、追手門学院大学の学生の就職状況をインターンシップ科目の運用変更のあった年度で比較することにした。そのために、運用変更前の2013年度と運用変更のあった2014年度、2015年度入学生の学部卒業生進路データを集めた。集めたデータは、2016年度卒業生1379名、2017年度卒業生1391名、2018年度卒業生1450名のものであった。そのうち、最短修業年限で卒業した学部学生4,220名を分析対象とした。地域創造学部は2015年度新設のため分析対象者から除いた。内訳は、2013年度入学生（2016年度卒業）が1264名、2014年度入学生（2017年度卒業）が1237名、2015年度入学生（2018年度卒業）が1199名であった。最短修業年限で卒業した学生を分析対象としたのは、同じカリキュラムを受講した学生を比較するためである。

卒業生進路データには、学部・学科、学籍番号、氏名、性別などのデモグラフィック項目の他に、企業分類、企業名称、大・中・小分類名称、職種名称、株式名称、資本金、従業員数などの企

業情報に関連する項目が含まれていた。学生の就職状況は、これらの項目のうち学籍番号、大分類名称を用いて、就職決定か就職未決定かを調べた。就職の成否は、学校基本調査の区分に従い、就職決定には正規の職員・従業員、自営業主だけでなく、フルタイムで働く契約社員と派遣社員も含めた。就職未決定には一時的な仕事に就いた者としてパート・アルバイトの他に、進学及びその準備中や家事手伝い、ボランティア、留学、就職準備中の者を含めた。

キャリア形成科目の単位修得状況として分析対象にした科目は、履修登録者数が一定数以上あるキャリア形成科目である「キャリアデザイン論」「キャリア形成論1」「キャリア形成論2」「社会人の基礎」と「インターンシップ」の正課5科目であった。

3 結果

3.1 単純集計

Table 4は、分析対象者の属性を入学年度・学部別に集計したものである。

Table 5は、各キャリア形成科目の単位修得状況を入学年度別に示したものである。各キャリア形成科目の単位修得率は、各科目の単位修得者数を最短就業年限で卒業した学生数で除して求めた。

Table 4 入学年度・学部別属性（人数）

（人）

学部	入学年度	2013		2014		2015		2013	2014	2015
	性別	男	女	男	女	男	女	学部別 計	学部別 計	学部別 計
経済学部		278	44	288	36	251	35	322	324	286
経営学部		237	132	269	123	271	114	369	392	385
国際教養学部		99	104	97	110	102	97	203	207	199
心理学部		64	143	67	116	62	122	207	183	184
社会学部		64	99	69	62	70	75	163	131	145
男女別 計		742	522	790	447	756	443	1264	1237	1199

Table 5 キャリア形成科目の単位修得状況（入学年度別）（人）

	2013年度入学生		2014年度入学生		2015年度入学生	
	修得者数	修得率	修得者数	修得率	修得者数	修得率
キャリアデザイン論	863	68.3%	993	80.3%	996	83.1%
キャリア形成論1	152	12.0%	288	23.3%	236	19.7%
キャリア形成論2	87	6.9%	246	19.9%	284	23.7%
社会人の基礎	99	7.8%	44	3.6%	39	3.3%
インターンシップ	177	14.0%	119	9.6%	174	14.5%
卒業者数	1264		1237		1199	

3.2 インターンシップの単位修得と就職成否の関係

まず、インターンシップの単位を修得した学生とまったく修得していない学生の間で就職の成否に差があるかどうかについて分析した。Table 6は、インターンシップの単位を修得した学生と就職成否のクロス集計表である。

Figure 3はインターンシップの単位を修得した学生と修得していない学生それぞれについて、就職が決まったかどうかの割合を入学年度ごとに示したものである。インターンシップの単位を修得した学生の就職決定率は、2013年度入学生で約

93.8%、2014年度入学生で約97.5%、2015年度入学生で約95.4%であった。また、未修得学生の就職決定率は、2013年度入学生で約83.7%、2014年度入学生で約87.7%、2015年度入学生で約88.3%であった。Fisherの直接法による正確両側確率を求めたところ、2013年度入学生で $p=.000$ 、2014年度入学生で $p=.000$ 、2015年度入学生で $p=.003$ となった。したがって、すべての入学年度においてインターンシップの単位修得と就職成否に関連があることがわかった。

Table 6 インターンシップの単位修得状況と就職成否のクロス集計表（人）

入学年度	インターンシップ 単位修得	就職の成否		総 計
		決 定	未決定	
2013	修得	166	11	177
	未修得	910	177	1087
2013年度 計		1076	188	1264
2014	修得	116	3	119
	未修得	981	137	1118
2014年度 計		1097	140	1237
2015	修得	166	8	174
	未修得	905	120	1025
2015年度 計		1071	128	1199

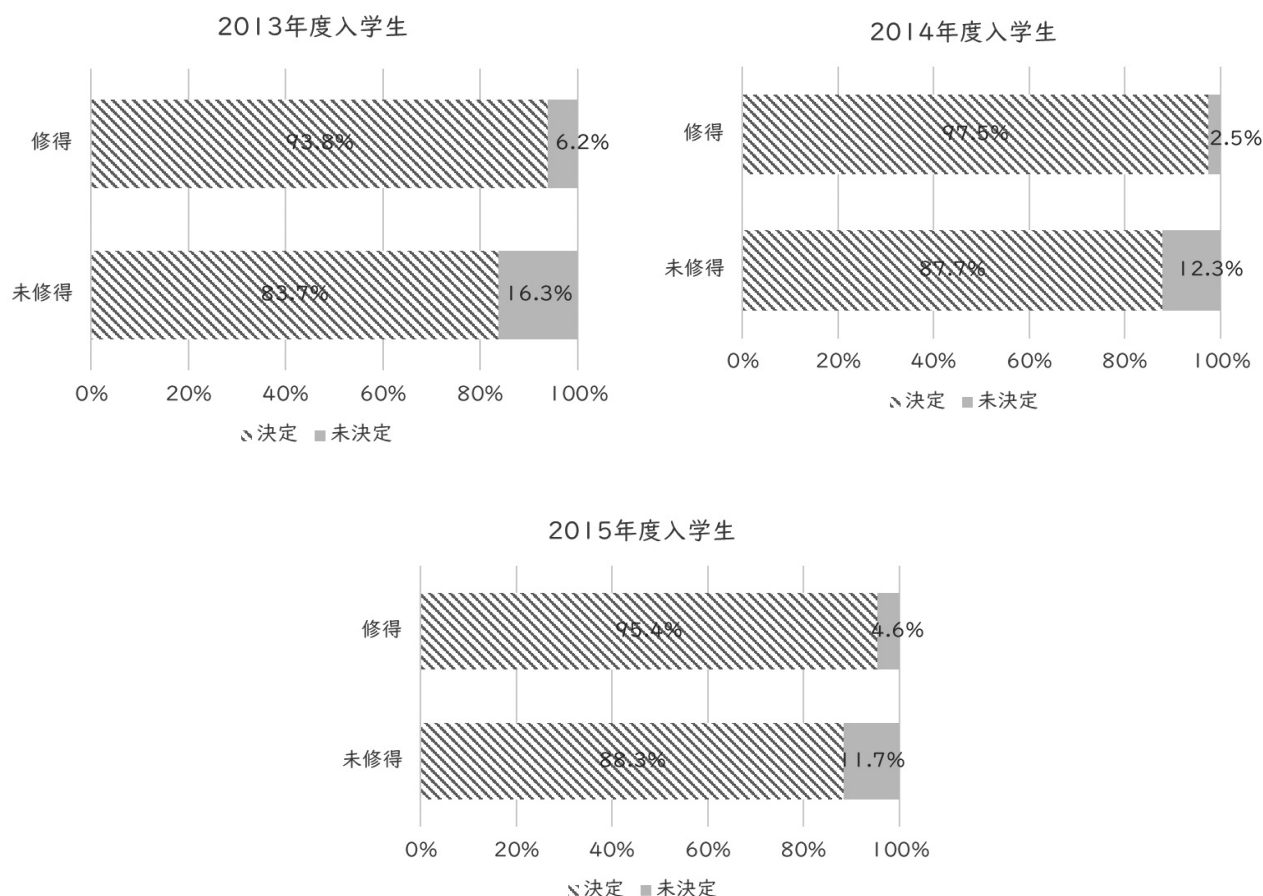


Figure 3 インターンシップの単位修得と就職成否の結果

次に、各キャリア形成科目の単位修得状況と就職成否について、Kendallの相関係数を求めた。Table 7は、2013年度入学生、2014年度入学生、2015年度入学生それぞれの各キャリア形成科目の単位修得状況と就職成否の相関係数を示したものである。いずれの年度もインターンシップと、就職成否の相関が有意となった。しかし、相関係数は高くなかった。科目間の相関では、キャリア形成論1と2に比較的高い相関がみられ、2013年度は.303、2014年度は.478、2015年度は.597であった。

さらに、各キャリア形成科目の単位修得が就職の成否に影響を与えたかどうかについてロジスティック回帰分析を用いて調べた。従属変数は就職の成否（1=就職、0=非就職）、独立変数は各キャリア形成科目の単位修得（1=修得、0=未修得）とした。Table 8は、2013年度入学生の結果である。独立変数のうち有意になったのは、キャリアデザイン論とインターンシップであった。それぞれの

オッズ比は、約2.3倍、約2.4倍であった。例えば、インターンシップの単位を修得した学生の就職できる確率は、単位未修得の学生が就職できる確率の約2.4倍であると考えることができる。Table 9は、2014年度入学生の結果である。独立変数のうち有意になったのは、キャリア形成論1とインターンシップであった。それぞれのオッズ比は、約2.1倍、約4.5倍であった。Table 10は、2015年度入学生の結果である。独立変数のうち有意になったのは、インターンシップのみで、オッズ比は約2.8倍であった。

Table 7 キャリア形成科目修得状況の相関（年度別）

Kendallのタウb

	就職成否	キャリアデザイン論	キャリア形成論1	キャリア形成論2	社会人の基礎	インターンシップ
2013 就職成否	1					
キャリアデザイン論	.164*	1				
キャリア形成論1	.025	.080*	1			
キャリア形成論2	.026	.058*	.303*	1		
社会人の基礎	.023	.066*	.119*	.060*	1	
インターンシップ	.098*	.153*	-.002	.052	-.007	1
2014 就職成否	1					
キャリアデザイン論	.073*	1				
キャリア形成論1	.106*	.143*	1			
キャリア形成論2	.082*	.120*	.478*	1		
社会人の基礎	-.028	-.025	.039	.057*	1	
インターンシップ	.091*	.148*	.106*	.071*	-.018	1
2015 就職成否	1					
キャリアデザイン論	.031	1				
キャリア形成論1	.035	.151*	1			
キャリア形成論2	.040	.184*	.597*	1		
社会人の基礎	-.028	-.005	-.032	-.036	1	
インターンシップ	.081*	.123*	-.013	-.062*	-.022	1

* 相関係数は5%水準で有意（両側）です。

Table 8 ロジスティック回帰分析の結果（2013年度）

2013年度入学生

科目名	配当年次	β	オッズ比	標準偏差	Z値	P値
（切片）		1.122		.122	9.221	.000
キャリアデザイン論	1・2・3・4	.832	2.297	.163	5.094	.000***
キャリア形成論1	2・3・4	.080	1.083	.277	.288	.774
キャリア形成論2	2・3・4	.142	1.153	.368	.387	.699
社会人の基礎	3・4	.129	1.138	.325	.396	.692
インターンシップ	3・4	.890	2.435	.326	2.732	.006**

Kappa=0.155, AIC=1033.117, BIC=1042.543

***P<.001 **P<.010 *P<.050

Table 9 ロジスティック回帰分析の結果（2014年度）

2014年度入学生

科目名	配当年次	β	オッズ比	標準偏差	Z値	P値
（切片）		1.581		.178	8.874	.000
キャリアデザイン論	1・2・3・4	.299	1.348	.207	1.440	.150
キャリア形成論1	2	.758	2.133	.309	2.452	.014*
キャリア形成論2	2	.395	1.485	.311	1.271	.204
社会人の基礎	4	-.478	.620	.431	-1.110	.267
インターンシップ	2・3	1.502	4.491	.596	2.522	.012*

Kappa=0.027, AIC=852.703, BIC=862.064***

P<.001 **P<.010 *P<.050

Table 10 ロジスティック回帰分析の結果 (2015年度)

2015年度入学生

科目名	配当年次	β	オッズ比	標準偏差	Z値	P値
(切片)		1.876		.212	8.840	.000
キャリアデザイン論	1	.094	1.098	.241	.390	.697
キャリア形成論1	2	.123	1.131	.314	.393	.694
キャリア形成論2	2	.279	1.321	.294	.948	.343
社会人の基礎	4	-.377	.686	.456	-.826	.409
インターンシップ	1・2・3・4	1.016	2.763	.377	2.693	.007**

Kappa=0.000, AIC=813.541, BIC=822.809***

P<.001 **P<.010 *P<.050

4 考察

本研究の目的は、インターンシップ科目の運用を変えることが大学生の就職成否に影響を与えるのかどうかを検討することであった。そのために、インターンシップの単位修得が大学生の就職成否に影響を与えるのかどうか、科目の運用変更の前後で比較した。

ロジスティック回帰分析の結果からは、いずれの年度もインターンシップが有意であることがわかる。実社会での就業体験活動が学生のキャリア発達を促し、結果として就職決定に結びついていると考えられる。ただし、インターンシップ科目を履修する学生は、そもそも就職に対する意識が高かったと考えることもできる。しかし、他のキャリア形成科目のオッズ比に比べて、インターンシップのオッズ比がいずれの年度においても高いことから、就職成否を学生個人の就職意識の高さだけで説明することには無理があるように思われる。やはり、インターンシップが就職結果による影響を与えたと言えるのではないだろうか。年度別で見ると、2014年度のインターンシップ科目のオッズ比が高かった。この年度は、この科目の学習を強化する取り組みを行った年度である。事前・事後の学習を強化する運用に変えた成果が、就職成否に表れたと考えることができる。ただし、Figure 3を見ると、インターンシップ科目の単位を修得しても未修得でも、そもそもの就職決定率は高い傾向にあるようだ。インターンシップの単位未修得で就職決定した学生の中には、就職に対

する意識の高い学生が単位認定の有無にかかわらずインターンシップに参加しているとも想定されるため、そのことが反映していると考えられる。従って、こうした取り組み強化が大学にとって重要なものであるかはわからない。しかし、事前・事後学習を必須とするなど、インターンシップに対する大学の積極的な関与が就職成否に影響を与える可能性については示唆されていると思われる。一方、2015年度のインターンシップのオッズ比は、2013年度と差がなかった。2015年度のインターンシップにかかる変更は、インターンシップへの参加人数を増やすことを目的としたものであった。インターンシップに参加するだけでは、就職成否に影響を与えないことが示唆された。

インターンシップが大学生の就職成否に影響があることは、吉田（2017）の先行研究でも明らかになっている。本研究では、さらに、参加するだけでなく事前・事後の学習を充実させることが就職成否に影響していることが示された。しかし、事前・事後学習の内容については検討していない。大学が学習を強化する取り組みに転換したことにより、就職やインターンシップにより積極的な学生がこの科目を履修するようになったとも考えられることから、履修する学生の選別につながった可能性もあるだろう。具体的な学習内容の効果については、今後の検討課題である。

インターンシップのような職場体験活動は、キャリア発達を促す効果的な実践でありキャリア教育には欠かせない教育活動である。文部科学省等（2015）は、インターンシップの教育効果を高

めるには、大学が積極的に関与していくことが重要であると述べている。大学はインターンシップが就職・採用活動そのものにならないよう見守りつつ、「学位の構成条件にふさわしい科目（文部科学省等，2015）」として運用することを求められている。また、「インターンシップの推進等に関する調査研究協力者会議（2017）」でも、「大学等におけるキャリア教育・職業教育や専門教育を強化していくために、産学協働で人材育成に取り組むことが重要となっており、その中でもインターンシップは効果的な教育手法と考えられている」と報告され、大学教育改革につながるものとして取り上げられた。したがって、大学は、インターンシップを「教育」として捉えることが重要であり、「教学」と「就職」を組織的に連携させて、それぞれが持つノウハウを活かして取り組むことが「量の拡大」と「質の充実」につながるのではないだろうか。

インターンシップを含めたキャリア教育の成果については、初等中等教育段階までは確立されつつあるが、高等教育機関においてはまだ途上である。就職成否が成果となり得るかどうかについて、今後は就職に関係のありそうな変数、例えば学生が希望する就職先に就職できたのかどうかなどを加えて、さらに検討していくことが必要であろう。そのためには、学内のIR情報の更なる活用と充実が望まれる。

5 参考文献

- インターンシップの推進等に関する調査研究協力者会議（2017），インターンシップのさらなる充実に向けて議論の取りまとめ
- 文部科学省（2010），大学設置基準及び短期大学設置基準の一部を改正する省令の施行について
- 文部科学省（2011），今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方（答申），中央教育審議会
- 文部科学省（2012），新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて（答申），中央教育審議会
- 文部科学省（2019），令和元年度 大学等におけるインターンシップの実施状況について
- 文部科学省，厚生労働省，経済産業省（2015），「イン

ターンシップの推進に当たっての基本的考え方」（平成9年制定，平成27年一部改正）

坂爪 洋美，梅崎 修，初見 康行（2020），インターンシップ参加効果の規定要因としての参加前のキャリア探索状態，生涯学習とキャリアデザイン，18巻，1号，PP.95-111

田中聖華・立野貴之（2021），学生のインターンシップ参加がキャリア形成にもたらす効果に関する一考察——ライフキャリアにおける「役割」視点から——横浜商大論集，54巻，1-2号，pp.75-84

吉田尚子（2017），大学生のキャリアに対する意識と科目履修から見たキャリア支援の在り方 追手門学院大学経営学研究科 修士論文

吉田尚子（2021），キャリア教育プログラムの変更が大学生の就職状況に与える影響 追手門経営論集，Vol.26. NO.2. pp.39-52, January, 2021

6 付記

- 1) 本研究は，研究内容が倫理的に問題ないかどうかを2018年9月，追手門学院大学研究倫理委員会で審査・承認後に実施した。
- 2) 追手門学院大学卒業生の進路やキャリア教育に関する資料の収集には，就職・キャリア支援課下川邦康氏（2018年当時）に大変お世話になりました。心より御礼申し上げます。
- 3) 神戸大学国際人間科学部4回生の吉田堯史さんには，インターンシップ参加学生として貴重な意見をいただきました。御礼申し上げます。